

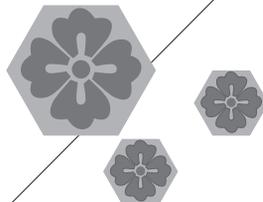
大岡忠相



突然寺社奉行に

作家

童門冬二



享保改革の広告塔

いま、江戸城内で標的にされているのは、老中筆頭（総理大臣）兼勝手掛（財務大臣）の水野忠之と、江戸町奉行の大岡忠相だ。ともに、將軍徳川吉宗の信頼を得、ほとんど幕政を牛耳っているとみられているので、当然反感と嫉妬と憎悪の念が渦巻くのはムリもない。

いままではそういう悪い感情を、吉宗がむしろ前面に出て防壁となってはね返してきた。しかしなぜか最近の吉宗は、その手を緩めた。そのため、壁の一角が崩れその崩れた穴からいつせいに不満の念が突入してきた。

その先頭に立っているのが老中の松平乗邑（のりさと）と江戸町奉行の稲生正武である。稲生は最近、前任の諏訪頼篤と交代したばかりだったが、長年江戸町奉行をやってきたような大きい顔をしている。その後松平乗邑がいるからだ。

つまり、
「虎の威を借る狐」

なのである。

大岡もバカではない。江戸町奉行をつとめる以上、民心の変化をよく捉える感覚を持っている。したがって、江戸城内の空気の変化に対しても敏感だった。伊勢山田奉行から江戸町奉行に抜擢されたのは、もちろん山田奉行当時の実績がものをいっただけでも確かだが、大岡はもう一面で別な捉え方をしていた。現代の言葉を使えば吉宗は大岡忠相という人間を、

「自分の展開する改革の広告塔にしたい」

という意図があったとみている。事前に大岡山田奉行の実績を細かく調べ、將軍になったときに、

「自分のおこなう改革が、より天下に宣伝されるような広告マンがいる。適任者は大岡だ」と考えた。

吉宗は將軍になる前に紀伊（現在の和歌山県と三重県）藩主だった。徳川御三家のひとつである。大岡が





管理する山田地域の隣に松阪という地域がある。これは紀伊藩の飛地だった。御三家の統轄する地域なので、住民たちの鼻息も荒い。そのためいままでの山田奉行は、どちらかといえば紀伊藩に遠慮をして裁判なども地元にとって不利な判決をしばしば下した。ところが大岡はそんなことはしない。公平に判決を下した。いままでの判決がやや不公平だから、公平にすると不公平に慣れた連中からみると、

「あの判決は不当だ」ということになる。それだけ松阪の住民たちは思いあがっていたのである。それに大岡はビシヤツと水をかけた。当然、松阪の住民たちから紀伊藩庁へ訴えがいく。藩庁ではこれを藩主の吉宗に告げる。しかし吉宗は相手にしない。笑って、
「それは山田奉行のほうが正しい」と退ける。しかし吉宗は、
「紀伊藩に楯突いて、そんな判決を下す山田奉行はいったいなんという

やつなのだ」

とひそかに大岡を調べる。公平を重んずる吉宗は調査結果をきいて大岡の人柄を知り、大いに気に入った。(できれば、すぐ紀伊藩に迎えたいがそうもなるまい。もし他日、自分が青雲の志を遂げること、「將軍になること」があれば、そのときはぜひ仕事を助けてもらおう)

と思った。調べた結果大岡は実に誠実な人間で実直そのものだ。が、得てして誠実で実直な人間は知力に欠ける場合がある。ところが大岡は違う。またユーモアもあるらしい。いい加減ことをいって民を騙したりハッタリを告げるようなことは絶対にならない。頭がよくて誠実ということは吉宗の求める、
「民を守る護民官像」
にピッタリ適合する。

そして吉宗に「青雲の志」を実現する機会がやってきた。巡りめぐってかれは八代將軍に就任した。すでに、自分なりの政治をめざす吉宗はその政策の数々を紀伊藩で実験済みだった。

したがって、紀伊藩で実験し民から善政だとよろこばれた政策を数多く引っ下げて江戸城に入っていた。



吉宗は、
「これらの政策を藤元の首都である江戸で実験しよう」
と考えていた。そして、

「その実験者は大岡である」

と、はじめから江戸町奉行更迭の人事を考えていたのである。そして、その企ては見事に的中した。現在の大岡は、

「江戸はじまって以来の名奉行だ」という評価を得ている。

本来吉宗の改革は、吉宗・水野忠之・

綱吉をわるくいえない吉宗



ところが江戸で騒ぎが起こった。米屋への打ち壊しの続出だ。いままで確立されていた大岡の広告塔としての効果がしだいに薄れてきた。このままいけば、吉宗改革の広告塔は、無惨にも倒れてしまう。いや、すでに倒れかかっている。

この事実に対し、大岡に心酔する部下たちは、

「これはあきらかに北町の謀略です」と怒って息巻く。北町というのはあきらかに北町奉行の稲生正武をさ

大岡忠相の三人トリオによって効果を上げてきたのだが、世間の受けとめ方では、水野の印象が薄い。

「いまのご改革は公方様（吉宗）と大岡町奉行によって推進されている」

と受けとめられていた。その意味では吉宗の意図は当たった。大岡は完全に、

「享保改革の広告塔」

の役割を果たしていたのである。現在のいい方をすれば、媒体としての能力を見事に発揮してきた。

している。ことごとくに大岡のやり方に対し反対し、同時に悪口を堂々と叫ぶ町奉行だ。その背後には松平乗呂がいるとみられているから、その部下たちがわめくのは、

「北町奉行は松平様と共謀でお奉行（大岡）を落とし入れようとしているのです」

という。大岡は苦笑した。そして、「待て待て、そういきり立つな」となだめる。部下のいうように確かに松平・稲生というコンビで水野・

大岡コンビの足を引っ張ろうという謀略があるのかもしれないが、しかしそれにしても大岡が考えるのは、

「民心（世論）の恐ろしさ」である。

いまの將軍吉宗は、神君といわれた幕府の創設者徳川家康を異常に尊敬している。改革をすすめる過程で障害の壁に突き当たると必ず、

「神君家康公の時代を考えよう」

という。そして納得しない部下大名に対しては、

「そんなことをいうが、神君家康公はこう仰せられたぞ」

と家康の言葉を引用する。これには別な理由があった。それは吉宗が將軍になったのは、五代將軍綱吉のおかげだ。したがって吉宗は綱吉は恩人なので頭が上がりたくない。悪口をいうわけにはいかない。ところがいま吉宗がおこなっている享保の改革は、いつてみれば、

「綱吉時代の放漫な財政の尻拭い」

なのである。生類憐みの令を出すように綱吉の政治の基本は、

「人と動物の生命尊重」

である。それはそれで人道的な目標として大いに尊重されるべきだが、これが基礎になって国民はしだいに、「自己の欲望の解放発散」



に走ってしまった。いわゆる「元禄時代」の華麗なくらしぶりが出現する。大いに消費能力が高まり、経済は成長した。この社会的風潮に江戸城の武士も毒された。そのために幕府財政の運営もしだいにゆるみがちになり、どんどん赤字が生じていった。湯水のようにザブザブと金を使ったからである。いくら財政当局（勝手掛）が、制止してもいうことをきかない。

「上様（綱吉）の方針だ。逆らうのか？」

と逆に逆ねじを食わせる。勝手掛は沈黙をせざるを得なかった。結局大赤字を生じた。吉宗はこれを始末しているのである。だから本当なら、「元禄時代のご政道が間違っていた。そのためにこんなひどい財政状況になってしまった」といいたいところだがそうはいかない。赤字の元凶である綱吉の推薦によって吉宗は將軍になったからだ。そうなると吉宗も考えた。

「綱吉公の悪口がいないのなら、別な手段が必要になる」

と考え、そのよりどころを幕府始祖の家康に定めたのだ。これならだれも文句のいいようがない。家康はとうのむかしに死んでいる。吉宗が、「神君家康公はこうおっしゃった」と告げても、吉宗のいつていることばを果して家康がいったのかどうか確かめようもない。そのまま従うよりほかがなかった。

小利口で多少ものを知っている大名や旗本の中には、

「神君家康公は無学だったときいて、上様がおっしゃるようなことを仰せられるはずがない」とさかしらに否定する者もいたが、しかし否定の根拠そのものが得られないのだから公然とこれを口にすることはできない。

大岡のきくところでは、家康は決して無学ではなかった。大変な学者なのである。家康は少年時代から青年時代を駿河（静岡県）の国主だった今川家の人質になっていた。このとき駿府（静岡市）内にある臨濟寺という大きな寺の住職太原雪斎（たいげん・せつさい。今川家の縁者。当主今川義元のブレンだった）からおびたらしい中国の古典の手ほどきを受けている。雪斎にすれば、



「今川義元よりも、竹千代（当時の家康の名）少年のほうが、はるかに教育のし甲斐がある。竹千代は将来立派な太守になるにちがいない」といわば、タニマチ的な期待を持っていた。つまり、

「教え甲斐のある弟子」として、家康に徹底的に学問を叩きこんだのである。とくに雪斎は中国の古典に詳しくあったから、『論語』『孟子』などから、『孫子』『六韜三略』などの兵学書まで教えこんだ。しかし雪斎がもつとも力を入れて教えたのが『貞観政要（じょうがんせいよう）』である。この本は家康が生涯、座右の書として大切にしていた書物だ。

古代中国の唐の二代目の皇帝だっ

水野の罷免と大岡の異動

家康はこの言葉を拳々服膺した。

吉宗もおなじで、かれが「目安箱」を紀伊藩主時代から設け、さらに江戸城でも活用したのは、この家康の考えをそのまま踏襲したものだといっている。家康が信奉した『貞観政要』の精神である、

「太宗（たいそう）が侍臣と、

「君主の政治はいかにあるべきか」

ということをテーマに、しばしば対話したものを綴ったものだ。この中で太宗は、

「君は船なり、民は水なり。水はよく船を浮かべ、またよく覆す」といっている。太宗は自分を船にたとえ、国民を水にたとえたのだ。だからこの言葉は、

「水（国民）は船（君主・治者）がよい政治をおこなっていけば、波も立てずに静かに支えてくれる。しかし一旦悪政をおこなえば、水は怒って波を立て、場合によっては船をひっくり返してしまう」ということである。

「水（国民）の世論を大事にしなれば、船（君主・治者）は安心して政治をおこなえない」という、自覚と責任感から生まれたものだ。大岡はこのことを思い出していた。ただ大岡が引っかかっているのは、

「世論というのは、果して民の本当のきもちを告げているのか？」ということである。そこに部下たちがいう、

「主として北町奉行の稲生によって操作され、つくられた世論だ」というみかたが出てくる。しかし

反対派にすれば、たとえつくられたものであるうとなかろうと、

「世論は世論だ。従うべきだ」ということになる。一部作為的な

疑いのある世論は、ついに、名奉行大岡越前守という、開学の広告塔を押し倒してしまった。江戸市中に起こった米騒動は、いままでの大岡の「温かい行政」の実績を、ほとんど痕跡を残さず押し流してしまっただのである。

大岡はつくづく、世論の恐ろしさを知った。

そして大岡にとつて、もっと不利なことが起こった。それはかれをかばいながらともに二人三脚で吉宗の改革を支えてきた老中の水野忠之が、突然罷免されてしまったことである。これにはびっくりした。水野にとつても想定外のことであった。

部下からの報告をきくと、当日の水野は將軍吉宗から、





「今後は、毎日城に出る必要はない。健康も身体も悪そうだから、老体をいたわれ。体調のいい日だけ登庁するようにせよ」

といったという。これはあきらかに、

「現職である老中から退け」ということだ。きけば水野はその日潔く命に服し、また突然掌を翻したように冷たい態度に出る、江戸城内の関係役人や坊主たちの指示に従ったという。悠然と江戸城から退去していったそうだ。その姿は大岡にもすぐ想

像することができた。

（あの水野様なら、どんなひどい目にあおうとバタバタするようなみっともない真似はなさらないはずだ）

と思っていた。

あきらかに水野は失脚したのだ。

おそらく江戸城内のスズメたち（無責任な噂を立てる連中）は、

「松平様の謀略だ」

といているにちがいない。水野

はお役ご免になった日、宴会を開いてそれまで協力してくれた部下を懇ろにいたわったという。翌日、

「家督を息子忠輝にゆずる」

と隠居を宣言した。そしてすくない荷物をもとめ赤坂の別邸に移ったという。わずかな供の侍しか連れていかなかった。隠居した部屋に、

「兼好の間」という小さな名札を下げたという。兼好法師は『徒然草』を書いた。それが水野が片時も離さない『座右の書』であることを大岡も知っていた。

打ちこわしが一段落したとき、大岡は吉宗に呼び出された。吉宗の脇には老中の松平乗邑がいた。吉宗は大岡をみると、

「おう、いろいろご苦労だったな」

と声をかけた。そして、

「松平とも相談したが、おまえには今度寺社奉行をやってもらおうと思う」

といった。大岡はびっくりした。すぐ、

「寺社奉行は、たしかご譜代の大名でなければなれないと存じますが」

といった。吉宗はうなずいた。そして松平の顔をチラとみながら、

「そのとおりだ。だから、おまえを大名にしてやる」と告げた。

（続）